

SSKO

栃木ダルク

ニュースレター 第98号(2011, 6, 13)

Grow up!!

Drug Addictions Rehabilitation Center
DARC

薬物乱用防止への理解を

栃木代表 栗坪千明

薬物乱用防止は、大きく分けると三段階に分けられる。

まず一次予防は、「ダメ。ゼッタイ。」運動に代表されるクスリを一度も使っていない人に薬物の害や法律を教え、一度でも使わせないための広報活動である。

二次予防は、早期発見、早期治療である。クスリを使っていることをできるだけ早く察知し、専門機関に相談して、依存症が悪化する前に対応するというものである。これには、クスリの副作用による精神症状を除去し、離脱症状によるクスリへの強迫的欲求を抑えることなども含まれる。

三次予防は、依存症になってしまっていて、体にクスリを入れていないと日常生活がままならなくなっている人たちに対するリハビリテーションである。これは一次予防にもつながると、私は思っている。そもそも薬物を初めて使う際には、突然売人から手に入れるということは、まずあり得ない。既に使っている人たちが、使っていない人たちに広めるのである。この使っている人たちに治療とリハビリを提供し、使わなくさせていくことが予防につながると思う。

日本は、先進国の中では、ある程度一次予防が成功している数少ない国であると言える。これは、厚労省が発表している違法薬物の生涯経験率を欧米の国々と比較しても分かっている。

しかし、乱用者や依存症者は増加傾向にあることも無視してはいけない。ある研究者の統計では、覚せい剤の乱用者は200万人を越えるといわれている。一次予防だけを強調するのでは、既に乱用している薬物依存症者やその家族は羞恥心や罪悪感が募り、相談の機会を失い、早期発見を逸してしまうことになりかねず、負のスパイラルに陥ってしまう。

また、薬物による肉体的な害だけを訴えていく方法では、依存症という精神的な問題が表面化せず、身体的な問題がないからと過小評価してしまう場合も考えられる。私が受けた何人もの相談者は、薬物依存症について初めて聞いたという方も少なくない。気付いたらどうにもならない状態になっていたというケースがほとんどである。

私たちはリハビリを提供している施設であるが、そこまでする前に乱用を止める機会はなかったのであろうかと考えさせられる。つまり、乱用防止を推進し、

その網から漏れた人たちには早期発見、早期治療、そしてリハビリテーションにつなげていくという一連の流れをスムーズに行うことが大切であり、それが乱用者、依存症者の減少につながると思われる。

しかし私には、一次から二次につなげていくところがうまくいっていないように思える。一次予防、二次予防、三次予防それぞれを別の機関が行っていることもあるだろうが、何よりも一般の人たちの理解が深まることが大切である。付託を受けた機関も、一般市民の理解なくしては効果的に活動し難いと思われる。

成熟した先進国である日本は、本人の不注意や人間関係によって社会的弱者になってしまった人たちにも、優しい国であってほしい。

下野新聞 1月30日 掲載